

きつおん

## 吃音（どもっている）かなと思ったら

—幼稚園・保育所・認定こども園の先生へ—



国立障害者リハビリテーションセンター特別研究（平成27～29年度）

「発達性吃音に対する早期介入モデルの研究」 研究代表者 酒井奈緒美

日本医療研究開発機構（AMED）研究（平成28～30年度）

「発達性吃音の最新治療法の開発と実践に基づいたガイドライン作成」研究班

## 吃音って？

以下の3つの症状（吃音の中核症状と呼びます）のうちのどれか一つ以上が**多く見られる**と「吃音」の可能性が高いです。

- ことばの一部を繰り返す 「おねおねえちゃん」「なななななつやすみ」
- 音を引き伸ばす 「よーんかい」「s-しんぶん\*」
- ことばが出ない（ブロック） 「. . . ちから」

\* 「s-」は、「し」の子音部分の音が長く伸びていることを示す

以下の「**その他の非流暢性\***」も子供によく見られますが、これらが多いだけでは吃音とは判断しません。

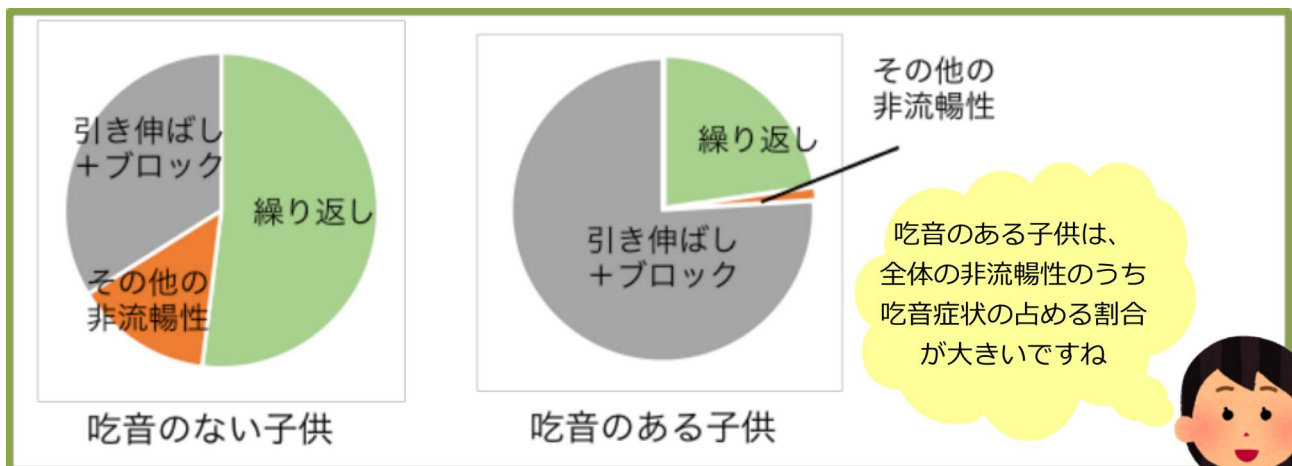
\*1 なめらかさを「流暢性」と言います。「非流暢性」=なめらかではないことです。

- 語句の繰り返し 「これは これは」「とけい とけい とけいがね」
- 挿入 「えっとね あのね それでね ぼくがね」
- 言い直し/中止 「じ. . . とけいが」（「じかん」と言おうとしていた?）

**随伴症状（随伴運動）**は吃音にかなり特徴的です。

話すときに、**手足を動かしたり、頭を振ったり、まばたきをしたり、話す前に大きく息を吸ったり**、などの動きが見られる場合もあります。これは、ことばが出にくいときに、何とか出そうとして自然と身につくその子なりの工夫であり（無意識の場合もあります）、吃音の症状の一部のことがあります。（話すのとは関係なく体がピクッと動くのは、吃音の随伴症状ではありません。チックかもしれません。）

解説：非流暢性のタイプの割合 (Yairi & Ambrose, 2005)



## 吃音という判断は？

- ・ その他の非流暢性ばかり → 吃音ではなさそう
- ・ 非流暢性のうち吃音の3症状が占める割合が大きい → 吃音かも
- ・ 吃音の症状が頻繁に（100文節\*2話したとき3つ以上）出てくる → 吃音かも
- ・ くり返しの数（回数）が1～2回だけ（例：「アアイス」） → 吃音ではなさそう  
3回以上（例：「アアアアイス」） → 吃音かも

\*2 文節の数え方：「ぼく きょう ようちえんに いったよ」→4文節

## 吃音に関するさまざまな疑問

### Q：どうして吃音になるの？

A：元々持っている体質（どもりやすさ）が原因の7割を占めると言われています。そこに、発達の時期（ことばの能力が急速に高まる時期）や環境（特別なものではなく、幼児期によくある、弟妹の出生、引越し、幼稚園入園など）の要因が加わって、吃音になったり、それが続いたりすると言われています。昔に言われていた「育て方の問題」は、現在否定されています。

### Q：いつ頃、どのくらいの数の子が吃音になるの？

A：最も吃音が出やすいのは2～3歳と言われていて、幼児期の吃音の95%は4歳までに始まると言われています。また、幼児期には100人のうち5～10人が吃音になると報告されています。専門的には症状が6ヶ月以上続く場合には、正常な言語発達の途中経過としてよく見られる非流暢性というより、吃音である可能性が高くなります。

### Q：吃音になったら、その後どのようにしていくの？

A：研究によって数値に多少差がありますが、吃音が始まってから2～3年後には6割、最終的には幼児期のうちに、おおよそ7割程度が治ると言われています。少数派ですが、吃音の頻度が増えたり、話し方が苦しそうになってきたり、悪くなる様子が見られる子供もいます。幼児期の吃音は変動が大きく、すっかり良くなったと思ってもぶり返すように見えることもありますし、その逆もありますので、一喜一憂せずに、3ヶ月から半年単位の長い目で見えていく必要があります。

### Q：どのようにかかわればいいのか？

A：原理としては「できるだけなめらかに話せる場面を増やし、吃音の話し方が定着しづらくする」です。一般的に、大人のかかわり方で子供が話しやすくなるとされているのは、以下の通りです。

- ① 周りの大人がゆっくり（ゆったり）話す（子供に「ゆっくりでいいよ」と言うのではなく、大人自身がゆっくり話す）
- ② 周りの大人が簡単な文、ことばで話す

- ③ 目の前（現在）のことについて話す（過去について話すことは難しいので）
- ④ 質問を減らす（質問を控えめにして、子供の話したいことに沿って会話をする）
- ⑤ 子供の気持ちが落ち着いている状態で話す（興奮しすぎると吃音が出やすくなる → 例：兄弟で競い合わず順番に話す）
- ⑥ 話し方のアドバイスはしない（「ゆっくりね」「おちついて」「深呼吸して」と伝えても、子供が話し方をコントロールすることは難しいので）
- ⑦ 言い直しを要求しない（子供にとって、話すことが楽しくなくなるので。あるいは「ダメな話し方をしたのかな」と思ってしまうこともあるので）

## 集団の中でのかかわり方

子供と一対一の場合は、前述の「どのようにかかわればいいのか」で述べた原理（できるだけめらかに話せる状況を作る）に沿ったかかわり方が基本となります。では、幼稚園、保育所・認定こども園など他の子もいる集団の中ではどうでしょうか。以下、保育園、幼稚園の先生への調査から、「どうしたらよいかわからなかった」、「この対応でよかったのだろうか」と迷った」と報告があった状況について解説してみます。



吃音のある子の話し方に、他の園児が反応します。真似したり、笑ったり。悪意はなく、先生に報告に来たり、「どうして『あ、あ、あ』って言うの?」と質問される場合もあります。

保育園・幼稚園の先生を対象とした調査の回答の中には、「みんなとちょっと違うなという正直な気持ちに対し、「いけません」と頭ごなしに注意するのもおかしいし、説明の難しさを感じた」という先生の回答もありました。

まずは、子供の疑問や反応に対しては先生にしっかり向き合って欲しいと思います。先生がきちんと答えることで、吃音のある子も、他の子も安心して生活できるようになります。

**「わざとじゃないから笑わないでね（真似しないでね）」**

**「ときどき、あああってなることもあるけど、〇〇くんの話し方の癖だから、〇〇くんのお話をしっかり聞こうね」**

などの対応で解決することが多いと思います。

吃音のある子供へのかかわりに限らず、普段から「やさしい気持ちで人の話を聞くことの大切さを伝えています」という先生もいらっしゃいました。そのような先生のご指導が、吃音のある子供にとっての話しやすい環境づくりとなり、吃音のない子との自然な共存につながると思います。

吃音のある子の話を、他の園児が聞き取れず、困った顔をしていたことがあります。そして私自身もしっかり聞こうとしていたのですが、聞き取れずにいると、子供が悲しい顔になってしまうことがありました。



吃音のある子のお話をちゃんと聞こうとしているのに、聞き取れずに困っているお子さんがいたら、先生が中に入って会話をサポートしてあげてください。通訳をするのではなく、先生も一緒に会話に入り「〇〇くんは△△なんだね」などと、コメント風に話をまとめて返してあげると、聞き取れなかった子も理解しやすく、お話をした子も聞いてもらえたという満足感が得られると思います。

先生が聞き取れない場合、ゆっくり1つずつ内容を確認していくとよいかもしれません。「だれと?」「いつ?」「どこで?」など、短いことばで返せる質問ならば、子供にとっても負担が少ないのでなめらかに話しやすいと思います。

ゆっくり確認する時間がない場合は、聞き取れたエッセンスだけを繰り返し、「〇〇くんがお話してくれたこと自体が嬉しいことだよ」というメッセージを伝えてください。「恐竜のことを話してくれたんだね。お話してくれてありがとうね」などでよいと思います。自分が話すという行為を認めてもらう経験は自信になります。



幼稚園での発表会、劇をするのですが、吃音のある子はセリフのない役にした方が良いでしょうか。

吃音のある大人の方から、「小さい頃セリフをもらえなかった」（それによって自分の話し方はダメなんだと思った）というエピソードを聞くことがあります。本人がセリフを言いたいと思っているのならば、その役を与えてチャレンジさせてあげてください。他の人と一緒に声を揃えて言ったり、歌を歌うときは吃音が出にくい傾向がありますので、お友達と一緒にセリフを言う役や、歌を歌う役もいいかもしれません。しかし、大人が勝手に決めるのではなく、どのような形でしたいかを子供と相談して決めるのがよいと思います。

吃音のある子のお話を最後までしっかり聞こうとしているのですが、時間がかかるため、他の園児に呼ばれてしまいます。



「どのようにかかわればいいのか?」で基本的なかかわり方を記しましたが、お子さん同士の間で「順番に話す」「他の子が話す番の時は、しっかり聞く」というルールを作るとよいと思います。吃音のある子のお話には時間がかかることがありますが、話しかけてきた時はできるだけしっかり聞いてあげてください。もちろん、他のお子さんが話している時に、吃音のある子が話しかけてきたときは「順番だから待っててね」と伝え、話が終わってから、しっかり聞いてあげてください。逆の場合も同様です。

子供に「順番」がわかりやすくするために、おもちゃのマイクなどを使い、それを持っている子が話し、他の子は静かに聞く、というようなルールを作るとわかりやすいかもしれません。

## 保護者へのサポート

保護者にとって、自身の子供を毎日みてくれている保育所・幼稚園・認定こども園の先生は、子供に何かあった時に相談したい人の1人です。吃音についても、保育所・幼稚園の先生への調査から、多くの保護者が先生に相談をしていることが分かりました。以下、保護者へのサポートとしてどのようなことができるか、提案します。

### 1. 情報提供

保護者が「どうかかわったらよいのか」「相談に行った方がよいのか」「どこに相談すればよいのか」など、情報不足で困っている場合は、下記の内容を伝えてください。

#### ① かかわり方

このパンフレットの「どのようにかかわればいいのか？」p. 3の情報を伝えてください。

#### ② 相談に行くべきか

以下の様子が見られたら、専門家への相談を勧めてください。

- 吃音の状態が1年以上続いている。
- その1年のうちに症状が悪化している
- 話し方が苦しそうである
- 子供が話し方を気にしている
- 小学校入学までの期間が1年以下である



#### ③ どこに相談に行くか

幼児の吃音に関する支援は主に言語聴覚士が担当します。地域の保健センターや都道府県の言語聴覚士協会に問い合わせると、幼児の吃音の指導を行っている言語聴覚士のいる病院・施設・医院などを紹介してもらえます。担当診療科は、耳鼻咽喉科、小児科、リハビリテーション科など、施設によっていろいろです。公立のリハビリテーションセンターや子ども（小児）医療センター等でも幼児の吃音に対応していることが多くあります。

大学の教育学部には、言葉の問題の相談に応じてくれるクリニックや相談室があることがあります。また、地域の小学校の「ことばの教室」では、就学前相談を受け付けているところがあります。これらは特別支援を専門とする教員が主に担当しています。また、小学校の特別支援教育コーディネーターが連携を担っていることもありますので、地元の小学校や教育委員会に問い合わせることもできます。

発達性吃音（幼児の吃音のほとんど）は発達障害者支援法の対象であり、法律に基づいた公的な支援を受けることができます。また、吃音以外の発達障害や知的障害、ダ

ウン症などのお子さんが吃音を示すこともあります。これらについては、地域の発達障害者支援センターや自治体の福祉相談窓口で対応可能です。

## 2. 子供についての共通理解

吃音は周りの環境によって、現れ方が違うことがありますので、保護者から家での様子を聞き、園での様子を保護者に伝え、子供へのかかわり方を一緒に話しあえる体制を作っておくと、保護者も安心できると思います。専門家へ相談しているお子さんの場合は、保護者が専門家から得た情報を先生も共有し、保育・教育場面に取り入れていただくと、子供への支援が倍増します。

### <引用文献・参考文献>

1. Yairi, E., & Ambrose, N. G. (1999). Early childhood stuttering: I. Persistency and recovery rates. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 42, 1097–1112.
2. ギター, B. (2007). 吃音の基礎と臨床: 統合的アプローチ. 東京, 学苑社, 2007. (英語版は2019年に第5版が出版されているが、日本語版は第3版の翻訳である。日本語版は絶版となっているが、図書館に所蔵されていることがある。)

文責：発達性吃音の研究プロジェクトメンバー（酒井奈緒美）  
国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 感覚機能系障害研究部  
〒359-8555  
埼玉県所沢市並木4-1  
TEL：04-2995-3100  
FAX：04-2995-3132

HP：<http://www.rehab.go.jp/ri/kankaku/kankakuj.html>

吃音研究プロジェクト Web サイト URL（資料のダウンロードが可能です）  
<https://plaza.umin.ac.jp/kitsuon-kenkyu/>



イラスト出典：いらすとや (irasutoya.com)